

「農業技術の匠」：^{ふじわら} 藤原 ^{ちようぞう} 長 蔵 さん（ 秋田県雄勝郡羽後町 ）
～ 豪雪地域における低コスト周年園芸の実践 ～



〔 藤原 長蔵さん 〕

1 技術確立の背景(目的)

- ・羽後町は秋田県の中にあっても豪雪地域として知られ、水稻主体の農業でしたが、昭和40年代から施設栽培のオクラが始まりました。産地として動き出したオクラと組み合わせ、施設を有効利用する必要があり、藤原さんを中心に低温開花性のストックの栽培が始まりました。しかし、当時は技術情報が少なく、生産性が低かったため、八重率を高める技術確立が求められていました。
- ・また、オクラについては、4月中旬から8月上旬の短期間に、単位生産性の向上を図り、施設園芸作物とし地域に定着させるための技術対策を求められていました。

2 技術概要(技術効果)

- ・ストックについては、ブロック育苗、自家製播種機の導入により、発芽揃いが安定し、八重鑑別技術も確立できました。これらの技術を組み合わせることによって、以前は70%台であった八重率を90%以上にまで引き上げることができるようになりました。
- ・オクラの生育環境に悪影響及ぼさない極限の採植密度(約13千本/10a)の導入と、高温性作物の生理的欠点(気温、地温の確保等)の克服により、単位当たり生産量は24,000パック/10a(6本/パック)と安定しました。

3 技術の地域への活用状況(普及状況)

- ・新成園芸組合長、JAうご花卉園芸部会長としてストック、オクラ、フクタチ等の作付け拡大に取り組み、現在施設栽培のオクラ、ストックは秋田県内トップの産地となっています。
- ・特にストックの八重率向上技術は取り組む生産者が多く、普及率はブロック育苗50%、播種機100%で、部会全体の八重率向上に結びついています。
- ・オクラ栽培におけるハウス占有期間は、110日程度であるが栽培者平均の単位当たり出荷数は、坪当たり約80パック(6本/パック)を確保し、地域の基幹作物として定着しました。
- ・オクラ、ストック、フクタチの組み合わせによる作付け体系は、独自の技術導入と普及により、地域農業後継者確保につながっています。



〔 ストック八重鑑別 〕

※最寄りの普及指導センター { 秋田県雄勝地域振興局農林部普及指導課
住所：秋田県湯沢市千石町2-1-10
TEL：0183-73-5114

<技術のポイント>

低コスト、施設の効率的利用による周年作型

- ・ オクラの春定植5～8月収穫、続いてストックの夏定植秋～冬収穫、その後の地域特産フクタチ等を組み合わせ、暖房コストを極力抑えながら、施設の効率的利用を考慮した周年作型を実践している。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
オクラ			○	-▽-	-□□	□□□	□□□	□□					補助加温
ストック							○	-▽-	○-▽	---□	□□		無加温 補助加温
フクタチ	□□□	-▽-	□□□	□□□						○	---▽	---	無加温

※フクタチは秋田県南部の特産野菜で、定植後無加温でハクサイのとうを 15cm 程度に伸ばし収穫するもので、柔らかく甘みがあり低温伸長性の高い品種を選び栽培している。

こだわりのストック八重率向上技術

この地域のストックは藤原さんが主体となって導入。当初は技術情報が不足し、八重率が上がらず、収益性が低迷していた。このため、様々な方法を組み合わせることによって、当初は70%台であった八重率を現在は90%以上まで引き上げ、維持している。

- ・ **ブロック育苗の導入**：通常の育苗方法では発芽までの管理が難しく発芽が揃わないため八重率がなかなか上がらなかった。そこで、ハクサイ等の育苗方法として普及していたブロック育苗に注目、その結果、通常の育苗用土より乾きにくい、発芽が揃う、活着しやすい、生育が早いなどの様々なメリットが現れ地域内生産者に普及した。
- ・ **播種機の導入**：市販播種機から自家製播種機を試作、これまで雇用を活用し、手で播種していた時の約20分の1の作業時間で播種が可能になり、播種後の管理に時間差が小さくなり、発芽が揃うようになった。
- ・ **八重鑑別技術**：鑑別は播種後10日に必ず行う、鑑別前日に十分かん水を行う、ハウスは青ビニールシートで遮光（他遮光資材より確実に色の差が出やすい）、子葉の色の濃いもの、葉形が丸いもの、小さいものを確実に取り除き、必要苗本数まで間引きする。

単位生産性向上と生育環境の保持によるオクラの生産安定

オクラは、収穫終了時期が後作（ストック）との関係で8月上旬に設定されていることから短期間に単位生産性を上げるため以下の技術対策を講じている。

- ・ **主枝仕立て栽培**：10.5cmポットに種子を4粒播種し、30cmの株間でそのまま定植することにより、主枝+側枝栽培に比べ収穫開始が4～5日早まり、育苗株数が2割減、植付け本数も1割増え反収の向上と労働時間の短縮につながる。（慣行栽培：1ポット3粒、株間25cm）
- ・ **地温の確保**：オクラは高温性作物のため、特に定植、初期生育時の地温及び土壌水分の確保が重要である。そのため、畦立て後、植穴にあらかじめ水田用の溝切り機で溝を作り（深さ約10cm）マルチを被覆する。